

## トルコギキョウ斑点病の発生について

病 害 名 : トルコギキョウ斑点病

病 原 体 名 : *Pseudocercospora nepheloides* (= *P. eustomatis*)

発 生 作 物 : トルコギキョウ

### 1. 発生確認の経過および県外での発生状況

- (1) 令和元年5月、県央、鹿行、県南および県西地域のトルコギキョウほ場において、葉に黒褐色ですす状の病斑を生じる症状が確認された(写真1, 2)。茨城県農業総合センター園芸研究所が、病斑から単孢子分離した菌株の rDNA ITS 領域の塩基配列を *Pseudocercospora nepheloides* (= *P. eustomatis*) と比較した結果、両者の塩基配列は99%相同であった。加えて、分生子の形態的特徴から、本病害は本県では未確認の *P. nepheloides* (= *P. eustomatis*) によるトルコギキョウ斑点病と判明した。
- (2) 国内における本病の発生は、平成20年に福岡県で初めて確認された後、平成28年以降に複数の県で発生が確認され、現在までに15県から特殊報が発表されている。

### 2. 病徴

- (1) はじめ、葉に5~10mmの退緑斑が生じ、その後、黒褐色のすす状の病斑となる(写真2, 3)。
- (2) 病斑は下位葉を中心に発生するが、蔓延すると上位葉へと進展する(写真1)。また、この病斑は葉の表・裏両面に発生する。

### 3. 病原菌の特徴と発生生態

- (1) 病原菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属する。分生子は無色~淡オリーブ色、倒棍棒状で、隔壁を有する(写真4)。
- (2) 本病は、夏季の高温期を除き、春から秋の多湿条件下で多発する。病斑上に形成される分生子により被害が拡大するが、生態や伝染環についての詳細は不明である。なお、現在確認されている宿主はトルコギキョウのみである。

### 4. 防除対策

- (1) 多湿条件で発生が助長されるため、施設内の換気に努める。
- (2) 病勢が進展すると防除が困難となるので、発生初期に速やかに発病部位を除去し、表の薬剤により初期防除を徹底する。
- (3) 取り除いた発病部位、発病株、残渣は二次伝染源となるので、ほ場外に持出して速やかに処分する。

表 トルコギキョウ斑点病に登録のある農薬 (令和元年6月1日現在)

薬剤名	希釈倍数	使用方法	使用回数	散布液量
ダコニール 1000	1000 倍	散布	6 回以内	100～300L/10 a



写真1 多発生した圃場



写真2 すず状の病斑部位 (拡大)



写真3 病斑部の拡大  
(小黒点状の分生子座)



写真4 病斑部に形成された分生子